

カナ、どうしているかな。さつきから、ミカはそればかりが気になって、ユカたちの話が一つも耳に入らない。

ミカは今日、吹奏楽部のメンバーと隣町の楽器店へ小物を買いに来ている。学校では、カナも含めて、駅前で待ち合わせる予定だったけれど、昨晚、ラインで直接、楽器店で集まるうということになったのだ。カナは、ラインをしない。いつもは、ラインで知った情報は、ミカがカナに伝えている。カナ、どうしているかな。ずっと気になる。待ち合わせ場所が変わったことをカナは知らない。買い物をしている間、ミカは落ち着かない気持ちで、ちっとも楽しくなかった。

ミカはユカたちとラインをするのが楽しかった。昨日の夜も、いつもの調子でメンバーとラインをしていた。そのうちの一人が急に明日の待ち合わせを楽器店にしようと言い出した。みんな軽い気持ちでオーケーしたけれど、ミカはカナのことを思い出して、カナには伝えておくね、と書き込んだ。

「めんどうだね。ラインしない子は。」

「もう、いいんじゃない。」

一瞬ミカは迷ったが、結局、カナに知らせることはしなかった。

大丈夫だね。みんなが来なかったらきつと家に帰るはず。

夜、カナからミカの自宅に電話があった。

「今日、何かあったの。どうしてみんな来なかったの。私、場所を間違えたのかなと思ってたんだけど。」

ミカは言葉に詰まった。

「えっ、あっ、待ち合わせ場所が変わったんだ。カナに伝えてなかったっけ。ごめんごめん。」

「そうなの。みんなは楽器店に行ったんだね。残念だなあ、楽しみにしてたんだ。」  
ミカは、しどろもどろに言い訳して、あわてて電話を切った。心がドキドキして、カナの心細そうな声が耳から離れない。ミカは、自分の部屋に駆け込んでベッドに潜り込んだ。

今日、カナはどのくらい待っていたんだろう。私がカナにわざと伝えなかった。ラインをしないカナを、みんなが時々うざったく思っているのを知っていた私。

今日のことも「いいんじゃない」って言われて、そうかなって思ってしまった私。  
「楽しみにしてたんだ」カナの言葉が心の中にずっとこだましている。カナのこ  
とだから、ずっと待っていたんだろうな。何で伝えなかったんだろう。私はカナ  
の信頼に応えていない。胸が締め付けられるようになって、涙があふれてきた。  
ミカはベッドの中で声を抑えて泣いた。

次の日、ミカは重い気分で学校へ向かった。私、なんてことをしたんだろう。  
地面に転がっている石ころを一つ一つ見ながらミカは歩いた。  
ぽんっ。

誰かが、後ろから肩をたたいた。カナだった。

「おはよう、ミカ。私、ラインできなくてご  
めんね。ミカには迷惑かけちゃうけど、何か  
あったら、また教えてね。」

ミカはカナの笑顔を見て、のどの奥がキュ  
ッとつまった。言わなくちゃ。

「昨日はごめん。カナ。……」

それ以上は、とても言葉にならなかった。ミ  
カの目に映るカナの笑顔がぼんやりになんじ  
んでいく。ミカの瞳から一粒の涙がこぼれた。

「ミカ、何泣いてるの。友達だよ、私たち。」  
並んで歩く二人の心の中を、五月の風が吹  
き抜けていった。



○ ミカがカナに待ち合わせ場所の変更を伝えなかったのはなぜか。

○ ベッドに潜り込んで泣いたミカは、どんなことを考えたか。ミカの考える  
カナの信頼とはどのようなものか。

○ 次の日、二人は並んで歩きながらどんなことを考えたか。

